

かごしま学の射程—序説—

河 野 一 典

江角学びの交流センターが開設され、機関誌『想林』を創刊してから、早12年の歳月が流れた。本巻の特集は「かごしま学の射程」と銘打った。じつは令和2年度は、コロナ禍により予定されていた文化講演会も「かごしま学」公開講義も中止となった。従来ならば公開講義や文化講演会を中心としたテーマで特集を組むことになっていたから、今年度は特集に何を置くべきか悩ましい事態となった。じっさい論文をご投稿いただいた諸兄は、令和2年度本学の正規授業「かごしま学」を担当された講師の方々である。これを機にそもそも「かごしま学」とは何かということを変えて問い直すことも良いのではないかと考え、「かごしま学」担当講師の論文をもって、特集「かごしま学の射程」とした次第である。

沿革・現況

さて、「かごしま学」という名称のもと、多くの分野から碩学の講師を招聘したオムニバス形式の講義が本学の正規授業（人間総合科目）として開講されたのは平成20（2010）年のことである。それ以来十余年の間、毎年公開講義・文化講演会を開催し、一般市民の方々にも聴講していただくなど、「かごしま学」の講義・文化講演会にご協力いただいた講師は延べ百名を数える。

現在の「かごしま学」はさらに拡充し、「かごしま学Ⅰ」（1年次前期・講義）から始まり「かごしま学Ⅱ」（1年次後期・演習）を経て「かごしまの未来プロジェクト」（2年次通年・実習）へと短大2年間、継続的に鹿児島について学ぶ科目を配置している。

「かごしま学Ⅱ」（演習）では、鹿児島市「まちづくり講座」のご協力のもと、課題解決型授業のワークショップを取り入れている。テーマは

「家庭ごみの減量化」「中心市街地の活性化」「鹿児島市観光農業公園（喜入グリーンファーム）の若者の活用促進」等々であった。

「かごしまの未来プロジェクト」は、時間割外で、1年間にわたる学外での地域貢献活動を単位化しているものである。令和2年度は「宇宿商店街の活性化事業への参画」をテーマにコロナウィルス感染予防対策を十全に施したイベントの実行委員として6名の学生が活動した。

そこで学んだ学生たちの成長を見るにつけ、その教育効果に疑念はない。郷土鹿児島には限りない教育資源が眠っており、それを見出す研究・教育の意義は誰もが認めるであろう。

ところが「かごしま学」として鹿児島という地域が、興味深い研究対象と教育のための教材を提供しているに過ぎないと思えるならば、残念なことである。確かに「かごしま学」の対象は、鹿児島の自然・歴史・文化・産業・社会等々、多岐にわたる。招聘した講師陣はその道の専門家として優れた見識をお持ちの方々である。惜しみなくその知見を多くの鹿児島出身の学生たちに披露してくださる。鹿児島に関わることならば射程範囲（range）を限ることはなく、その対象は全ての学問総体の対象に等しい。しかしながら、鹿児島の研究・教育をとおして得られた知識・知見を百科全書のように寄せ集めたものを「かごしま学」と言うのではないだろう。もしそうだとすれば鹿児島の歴史は歴史学の、鹿児島の様々な自然は様々な自然分野の学の一部として吸収されてしまうからである。学際的で独立した「かごしま学」と名乗るには何か別の理由が必要ではないか。いやしくも「かごしま学」と称する限り、何か俯瞰的・体系的な「かごしま学」固有の射程目標（perspective）がなければならない。「かごしま学」を創始したときに、そのような矜持があったかどうか定かではないが、その後十余年の歳月にわたり、多くの講師の方々と多くの学生たちによって支えられてきた今、そのことを問わずにはいられない。

ローカリズムとユニバーサリズム

ほぼ1世紀前の1931年に刊行された和辻哲郎氏の『風土』という書物がある。簡潔に言えば、われわれ人間の本質を考察するうえで、われわれが置かれている自然環境（風土）との関係性を抜きに考察することは

できないということが主張されている。私見によれば、和辻は人間の普遍性を追求する学として、実存（個人・実体的）に集中する西洋哲学にある種の違和感を持ち、関係性（間柄）に根を張る日本の世間・文化論の立場から一石を投じているように思われる。人間存在にとって母なる大自然としての風土を基盤に据えたより普遍的な人間学を構築しようとする試みである。俗にいう環境（風土）決定論ではなく、和辻にとって風土は人間存在の普遍的な拠り所だったのである。

われわれの「かがしま学」と称する地域研究を単なるローカリズム（地域主義）という言葉に言い包めてしまうことは本意ではない。確かにローカリズムはアンチ・グローバリズムという批判的対立項の役割を果たしてきた。安直なグローバリズムへの警鐘として、己の足元の生活を見直し反省する謙虚なローカリズムは、改めて地方の価値を再発見することに成功した。また、自然であれ歴史であれ、地域に密着した精密な学的調査・研究の進展はステレオタイプな教科書の記述を書き替えてきた。

ところが一方で、ローカリズムは異国・異民族間の紛争、ひいては昨今耳にする一国内での諸問題・対立の火種となり、世界を間違った方向に進ませることになりかねない。ローカリズムが偏狭なナショナリズム（利益誘導）や単なるお国自慢に陥ってしまう危険性を孕んでいることには注意しなければならない。

われわれの「かがしま学」がもつローカリズムはもちろん、偏狭なナショナリズムとは相いれないものである。もとより「学」は普遍的であらねばならない。万人に認められる普遍性を追求しなければならない。それゆえ地域研究（ローカリズム）もまた普遍的学（ユニバーサリズム）になりうる何か意味ある座標を提示しなければならないと考えるのである。

郷土愛は普遍的か

「かがしま学」を講義する碩学の講師の傍ら、末席に座して伝わってくることもある。それは諸兄の一方ならぬ郷土愛であり、鹿児島若手学生たちへの無条件的な愛情である。無条件的とは何も前提条件がないことを意味し、真に普遍的という意味に解しても良いであろう。それゆ

え「かごしま学」が学としての普遍性を担保するためには、郷土—自然であれ歴史・文化であれそこに暮らす人々であれ—への愛こそが原点に置かれるべきものではないだろうか。生まれ育った故郷や長年居住した土地を愛する心が、「かごしま学」という学的探求（愛知）を生む根源・出発点に置かれているのである。郷土愛は意識しようがしまいが、万人に備わった、あるいは万人が自覚すべきものだからである。

最後に「かごしま学」の将来の射程目標・展望を提示したい。それは地域間相互に対話を始めなければならないということである。ローカリズムとしての地域学は、隣県の「くまもと学」であれ「みやぎ学」であれ、もとより多数存在しうる。奇しくも「かごしま学」の担当講師の多くは他県の出身者である。郷土の愛し方について互いに学び合うことは多々あり、実り豊かなことであろう。地域学同士が対話する共通の普遍的な土俵（根底）は確かに存在し、それは郷土愛であると言うことができよう。地域の垣根を越えて互いに学び合うことこそが「かごしま学」の将来の展望である。

また、自然・歴史・文化・社会一般等の学的土俵のみならず、在野で日々郷土愛を実践している人々の生活というミクロの視点も重視しなくてはならない。なぜなら「かごしま学」を学として成立させる原点としての郷土愛は必然的に、生活する実践活動へと発展・開花することを希求するからである。「かごしま学」は知的探求にとどまらぬ、きわめて実践の学なのである。郷土愛に基づいた実践まで射程に入れた営みこそが「かごしま学」の本領である。

（本学教授・江角学びの交流センター長）